

古事類苑

植物部五

木四

桑

〔倭名類聚抄^{二十}〕桑 玉篇云、桑音莊、字亦作桑、和名久波。蠶所食也。

〔箋注倭名類聚抄^十〕按說文桑蠶所食葉木、顧氏蓋本之、則此誤脫葉字也。

〔伊呂波字類抄^久〕桑植物附植物具、葉正作桑。 蕙甚、ハノミ 榘 葉實已上

〔日本釋名^下〕桑 くはくう也、はは葉也、かいこのくふ葉なり。

〔倭訓栞^{前編八}〕くは略 桑は蚕のくらふ葉なれば蚕葉と名くるなり、くこと通ず、こはかひ

こ也、まぐは、白桑也、ひめぐは、女桑也、子を榘といふ、くはいちご也、桑耳はくはたけ也、山桑の

名漢も同じ、槩也といへり、新撰字鏡に、桔梗をからくはとよめるは心得がたし。

〔農業全書^七〕桑

桑は四木の一つにて取分貴き物なり、凡て人世の重き物は衣食に過る事なし、玄かれば五穀に次て必うゆべき物なり、古は人家ごとにやしき廻りに桑うへて、應じくゝに糸綿を取て、衣服の儲と玄たりと見えたり、殊に一度うへをきては、女功ばかりにて、農事の妨ともさのみはならず、草木こそ多き中に、青葉より糸綿の出る事實に奇妙の靈木なり、近來木綿を廣く作りて、其玄るし速かにして、下賤のために便りよきを専らとして、名所の外は桑の玄たて疎かになりたる、と見えたり、されど木綿も又土地所によりて、をしなべて作る物にあらず、山中雨霧のふかき所、其